

小径を歩行し美を思索する人

鳥巢郁美詩論・エッセイ集『思索の小径』

1

一人の詩人の中で詩と散文との関係をヴァレリーが舞踏と歩行の關係に例えたことは、よく知られている。そして詩が歩行という機能ではなく舞踏という芸術であるとした。その散文の非詩的な要素を削ぎ落としたヴァレリーの純粹詩的な詩の概念が、多くの詩人たちに今も少なからず影響を与え続けていて、詩が難解なもので意味が通じなくてもいいという特権的な立場の例えの一つにされている。ヴァレリーは決して舞踏だけしか認めないとは断定的に言ったわけではないが、いつのまにか歩行を忘れて舞踏だけが一人歩きし始めてしまった。しかし私は以前からこのヴァレリーの純粹詩の概念を批判的に受け止めていないと、詩人が世界から孤立していき独りよがりになる危険性を孕んでいると考えてきた。「これは詩ではない」と断定してしまう詩人たちの根拠が実は「舞踏」という危うい純粹詩の概念に寄りかかっているからに他ならないからだ。詩は実は歩行でありながらよく見るといつのまにか舞踏になってしまった。というような、歩行することから舞踏することへの必然性が感じられなければ、その舞

踏に感動することは出来ない。実際の詩作品を読む限り、歩行と舞踏は表裏一体で切り離すことは出来ないと考えるのは私だけではないだろう。鳥巢郁美さんのエッセイ集『思索の小径』を読んでいて、私は小径を歩行しながら思索する鳥巢さんの息遣いに詩作することの根本的な意味を濃密に感じて大いに共感を覚えた。

鳥巢郁美さんはこれまで十冊の詩集を刊行している詩人だが、折に触れて詩論・エッセイを書き続けてきた。それらをまとめたものが今回初めての詩論エッセイ集『思索の小径』である。鳥巢さんの詩歴は長く第一詩集『距離』は一九五九年、二十九歳の時に出版されている。冒頭のタイトルにもなった詩「距離」は半世紀が過ぎて古びていないで、現在の鳥巢さんの詩作やエッセイの本質を照らし出しているように思われる。

距離

黙って耐えながら

私は時間の奥行を抜けていった

見えない時間が私の中に蓄えられ

見えない物と物の索めあい

私の中で手を取り合っていた

水の上を歩くと落ちこむように
私はどこかの底へすべり込んでしまっ

言葉の公式がつづるものは
細かい水の粒でしかない
そのような言葉を交わすことは
隔たりを知ることだ
言葉の橋を渡るために
私は言葉を凍らせたい
そのかけはしを
びっしりと凍った水粒で埋めたい
私が
向きあった人の方へ渡れるように

時間が過ぎたけれども
私の時間はその度にぼうちょうした
誰にも会わない時間
私はすべての人につながっていた
物と物とはひきあっているのに
お互いを寄せ集めても
その置かれた場所を変えないように
冷たい姿勢をくずさないように
人と人と向きあったとき
人は自分の姿勢に気がついてしまう
二つの湯吞が向きあったように
自分の位置を離れることが出来ない
二つのもののあいだに隔たりがあることを
気付いてしまうのはその時だ
言葉のかけはしを渡って
私が向こうに行きつこうとしても
虹のように彩られているだけで
その上を歩くことは出来ない
確かめるように言葉にふれてみても
私の手は水の粒をつけてくるだけで
いくら多くの言葉を投げかけても

第一詩集の冒頭から、このような自らの詩論であり詩法とも言える内容を一篇でイメージ化した詩人は数少ないのではないか。鳥巢さんが自らの「時間の奥行」を内省すると「見えない物と物の索めあい／私の中で手を取り合っていた」という。そして「誰にも会わない時間／私はすべての人につながっていた」はずだった。しかし「人と人と向きあったとき／人は自分の姿勢に気がついてしまう」のであり、他者との距離を思い知る。言葉を交わそうとしても「言葉を交わすことは／隔たりを知ることだ」だったのだ。鳥巢さんは言葉

の限界やその伝達の不可能性に絶望しながらも、「言葉の橋を渡るために／私は言葉を凍らせたい」と願う。さらに「そのかけはしを／びつしりと凍った水粒で埋めたい」というイメージ化をして、「私が／向きあつた人の方へ渡れるように」と力強く詩作することを宣言しているのだ。「言葉の橋を渡るために／私は言葉を凍らせたい」という知的な作業に裏付けられた粘り強い思索が詩作となって記されている冒頭詩に、私は深い感銘を受けた。鳥巢さんは若くしてなぜこのような詩を出発から書くことが出来たのだろうか。

2

鳥巢さんには、詩誌「衣」を主宰している山本十四尾さんが優れた文体を持つ詩人がいるとの紹介で、「コールサック」をお送りするようになった。鳥巢さんも「コールサック」の詩運動に共感してくれて、詩作品の寄稿が始まった。また日頃は原爆などの社会性のある詩を書かない鳥巢さんが、なぜか二〇〇七年に『原爆詩一八一人集』の詩篇を公募した時に散文詩「原子力の行方」を寄せてくれた。その詩は冷静に原爆の威力を記しながら、国家権力のパワーゲームによって「核廃絶」を嘲笑っている現状を絶望的に憂えているエッセイ風の詩だった。しかしそれでも核兵器は必ず廃絶されねばならないという強い信念から、新作の詩は送られてきたのだ。この詩は本書の二章の最後にも再録されている。また

文体の魅力を形作っている。例えていうなら哲学者スピノザは神に酔える人と例えられるが、鳥巢さんの文章を呼んでいると、硬質な文体の中にも美意識という詩神ポエジーに酔える人のように感じられてくる。鳥巢さんには理系と文系が矛盾することなく共存していて、リアリズムとロマンチズムが銀貨の表裏のように重なっている。一章「御影の頃」の鳥巢さんの視線と歩行の息遣いを引用してみる。

少し降りると、電車の踏切を渡った辺り、開設したばかりの香雪美術館の杜で、小葉楓の丈高い枝が伸びて、アーチ状に続く道があり、家の西方からの、駅に向う蘇州園に沿う小道は、さし交わす枝で夏でもひんやりした、塀と石垣に挟まれたその一丁ばかりも疎水に沿い、なんとも落ち着いた佇まいを持っている。思索の小径と私はひそかに名づけて、朝夕歩いてきた。魚崎の前六甲道に居た頃、白鶴美術館を訪れた折に歩いて、心惹かれた道を、はからずも毎日通うようになった。人の成りゆきは分からぬものである。市道の水洗化で、天然石の川床が人造石になってからは、以前の趣も半減したのだが、秋には街中木犀がどこからともなく匂い、冷え込む頃になると真赤な楓が散り敷き、流れに落ちていてはつとさせさる。ふり仰ぐと、高々と陽に透いて、沁みるように色づいた枝が交わされている。桜は個人の家の各所にも相当の大樹があつて、どちらの道から

二〇〇九年に刊行された『大空襲三一人詩集』にも呉空襲を書いた詩「橙色に包まれた街」を寄稿してくれた。

一章の「二月の雪」を読むと、鳥巢さんは小学一、二年生頃に一年半ほど戦前の北朝鮮に暮らしていたそうだ。広島・呉の温暖な暮らしと北朝鮮の寒さの中でオンドルを使う生活様式の違いは、きつと鳥巢さんに民衆の暮らしの多様性を学ばさせたことだろう。鳥巢さんの経歴を見ると広島女高師理科卒業となつている。当時の理系の女学校について本人に確認すると、この学校は戦時中に女子にも理系の人材を育てるために作られた学校だったという。鳥巢さんは戦時中には呉の女学校に学んでいて、広島方向の空に原爆の光を目撃したという。戦後の昭和二十三年になって広島女高師に入学し、物理学・化学・鉱物理学を包括した「物象」を学び、教師となり理科を定年近くまで教え続けた。広島女高師は鳥巢さんの卒業後には広島大学に統合されたそうだ。鳥巢さんがなぜ冷静に物事を凝視するのは、理科教師としての視線があるからだろう。また広島島の学校であつたことは、戦後にも続く生き残つた広島島の被爆者たちの悲劇をきつと鳥巢さんは多数目撃し心を痛めていたのだろう。しかし鳥巢さんはあえてその体験を直接的には書かないで、自己の奥深くに沈潜させて、静かに思索的な詩篇に忍ばせてきたのかも知れない。

『思索の小径』での冷静な筆致のリズムの根底には、鳥巢さんの詩人としての情熱が底流していてその絶妙なバランスが行つても見事である。西には深田池、東には公園墓地が又いちめんの桜で埋まる。京都にはしだれ桜の頃出掛けるが、ソメイヨシノは殆ど自宅の囲りで堪能できる。こうなると今度は、吉野の丈高い山桜の連なる、閑雅な華やかさに接したい等と思う。／その年の三月上旬、市道水洗化を機に、庭というのもおこがましい程狭い玄関前だが、魚崎のマンシヨンの庭を手掛けられた、感覚のいい造園家に何とか格好をつけて貰つて、心配りのきいた小庭が出来ていた。昨年大鉢に植えておいたアネモネが、見事に花を咲かせたり、楓が赤い芽を吹いたり、櫻がいつせいに新葉をつけたり、人がどんなにせかせかと危機に陥つていても、間違いなく季節はめぐつてきていた。

私はこの箇所を読むたびに、奈良時代の頃から千数百年も続く桜などの四季折々の花々や木々への民衆の暮らしを支えた美意識の原型を感受するような心持ちになる。もちろん日本列島の歴史は広く深いので、弥生文化だけが日本文化の基底とはいえない。

しかし近畿地方の根底には鳥巢さんの深層に刷り込まれている花や木々に寄せる美の文化が存在していることは確かだろう。たとえ政変・戦争・地震等の天変地異があろうとも、「どんなにせかせかと危機に陥つていても、間違いなく季節はめぐつてきていた」と言い切れる美意識が鳥巢さんの文体に宿

っているように感じられるのだ。

なぜかこの「御影の頃」の文章は散文を読む愉悦を感じさせてくれ、何度読んでもはっとするような趣があり、鳥巢さんが毎日通いながら次第に親密感をまし、その魅力を心地よい描写で刻んでいる。「思索の小径」とは、街の表層である広い道路ではなく、街の深層ともいえる裏側の町に多方向にはりめぐらされている小径こみちを歩きながら、ゆったりと考えることの重要性を暗示している。家々の植木や石塀、街路樹や疎水沿いの小道を見ながら考えることは、脳の潜在能力を活性化させ、豊かな発想を溢れさせるだろう。鳥巢さんが考えるとは、日々自分にとって大切な時間や場所を持ち、そこで小さな自己を開放させて、他者の創り上げた暮らしの中の美を賛美することのように思われる。

鳥巢さんは街の中に様々な美を発見する。その美を求める精神がこの散文をなだらかに読むものに湧水が流れるように沁みてるのだ。人の歩く速度で美は発見されなければならぬ、と鳥巢さんの散文を読んでいると思われてくる。人が歩く肉体の速度こそが人がものを考える根本的な速度ではないのか、そのことを忘れていけないと一章の十五編のエッセイで鳥巢さんは語り続けている。

鳥巢さんの暮らす西宮市仁川も阪神淡路大震災に遭った。被害も大きかったそうで、近所で亡くなった方もいたという。

詩友であり抽象画家として高名な津高和一の絵画を詩集の多くの表紙画に鳥巢さんは使用している。津高和一は神戸の震災で亡くなったそうだが、本書でも鳥巢さんは津高和一の絵を使用したいと語った。津高和一の抽象絵画と鳥巢さんが無言の対話をしていることが分かる。その震災後の街並みのことを綴った「秋の足音」もさりげなく不屈の人々の生活感が出ていて心強く感じるが、「雑草のある暮らし」も鳥巢さんの野草の命を見詰める視線が奇跡を見るような驚きに満ちていて、純粹な精神性を感じることが出来る。

3

二章「論説」十編では本格的な詩論・芸術論・自我論・教育論・政治権力論・平和論が書き記されている。鳥巢さんの「論説」は思索のプロセスが生々しく辿ることができる。鳥巢さんは感じるように考えることが出来る人なのだ。その生々しい思索の痕跡を辿ることが鳥巢さんの文章を読むことの恵みであるだろう。詩論を紹介するには、「誘いの径」が最適だろう。

ものを書くということは、疎通への意志を紙面にのせることである。個々の肉体、個々の感覚をもった人間同士が編み出した、言葉というまことに窮屈きうくつな代物を通して、何かを語りかけることであろう。相手はどこにいてもよい。

唯生と生のあいだに通じあわせる媒介物があるからには、それを組みあわせることによって可能な限りその制約を乗り越え、他者の精神内部へ行きつこうとする何等かの意志が働くとき、人は自然に言葉の組み合わせを考えるようになる。そのような衝動があつて始めて人は筆をとろうとするのではないか。／必ずしもそれは大きな意味内容をもたなくてもよい。ひとつの美に対する、又は驚きに対する共感であつてもよい。憤りや怒りであつてもよい。勿論膨大な思考の流れであつてもよい。その源には必ず何らかの感動の泉があるのだ。ある種の感動は美であるといえるかも知れない。文芸作品が美を志向しているというのは、この感動の深さを云うことになるのだと思う。

鳥巢さんの文体の魅力は、ものを書くことの衝動の根源を自然に奏でてしまうことだ。「他者の精神内部へ行きつこうとする何等かの意志が働くとき」という発語に高まっていく精神の沸騰点を示す瞬間に、言葉が発生してくる本質を見出そうとしているのだ。その「何らかの意志」を「疎通への意志」だと明言し、鳥巢さんの視線は外界の明るみの中で人間の精神の在りかを探りながら厳密に記されている。「疎通の意志」とは、感動を伝えようとすることであることを告げ、さらに「感動は美である」と洞察している。したがって詩人、文学者、芸術家たちはある種の「感

動の深さ」を競っているのだと言い切っている。鳥巢さんにとって美意識こそが言葉を生み出す初源の力であることを確認することが求められていたのだろう。その意味では詩とは、美意識と詩作との緊密感が織りなす試みであることを根幹に据えているのが鳥巢さんの詩論なのだ。そして次のように詩的言語の意味を拡げている。

詩心が詩となるために使う言葉が別の機能をもっているとすれば、音楽が語りえない何か展きえない何かを、言葉はもつてはいはしないか。そこまで考えてきたとき、言葉を使った詩が感覚だけではすまされない何かを孕んできそうである。つまり言葉を記号として、即ち物質として扱えない宿命みたいなものがついてまわるのである。そうして又それは、言葉の特別な使命であるかも知れない。詩心が詩作品になる時に、同時に感覚が意味を内包すべく仕向けられているわけなのであり、詩作品はその時、感覚だけからは幾分はみ出した分野において、詩の行為を展開してゆかねばならなくなるだろう。そこにはある種の哲学的思想も、社会意識も、充分含まれてゆく筈だし、その分野は非常に広くひきのばされているのである。(略) 思考が常に飛躍して、いくつか先のことをいきなり持つてくるような表現をとる場合がある。抽象というのはそういうことで、これは絵画の場合も同様で、対象に内在するものを探るには、

自然にそうなってしまうのだ。その形式も非常に個性的なもので、作者によって各々独自の方法がとられるのだが、具象といい、抽象といい、詩においては言葉という経験用語を使って、それらがどれだけの活力をもってくるかが問題なのであり、より深い浸透作用の美意識に高まることが大切なことなのではないだろうか。／散文の方は、順を追って次々と叙述せねば脈絡がつかぬに對し、抽象思考をそのまま扱っても、矛盾なく可能にし得る立場をもっと云える詩に於ては、感性と知性の總和の興行を、そこに存分にくりひろげてゆけそうである。

鳥巢さんにとって詩は「音楽が語りえない何か」であり、「物質として扱えない宿命みたいなもの」であり、「感覚だけからは幾分はみ出した分野」である。「哲学意識、社会意識」などが包含されてくるものに独自な特徴を置いている。具象も抽象もどちらも「言葉という経験用語」を使用して「どれだけ活力」を出して、「より深い浸透作用の美意識」に高まるかが最も大切なことであるかを力説している。鳥巢さんは詩「距離」で書いた「時間の興行」をこの詩論でもある「誘いの径」では「感性と知性の總和の興行」と論理的に語っている。その意味では詩作と詩論が一致している詩人で、これほどの詩論を書ける現役の詩人は数少ないだろうし、女性詩人でこのような論理的で思索的な詩論を書ける詩人は、あまり

るのであるが、異国であったか、同胞の間にあつたかはやはり、何らかの違いがそこに生じるだろう。多くの人が既に家庭を持たれ、第二の人生が固まつたかに見える。その人達の心の底の渴望の深さに胸打たれるのである。異国での逼迫した生活の中での、元敵国人の存在の立場がどのようなものであつたかを思うとき、生活の保障とは別の苦しみに追われ続けられたにちがいない。人は皆違つた地獄に直面しながら、他人の痛みをも我が身の上に重ねてゆく。地獄はまさしくこの世のものであつた。戦争もまた地獄をつくる。

鳥巢さんは地獄を作り出してしまふ人間の世をリアルに見ている。「地獄はこの世にある」という最たるものを中国残留孤児達や戦争犠牲者達に見ている。国家が近視眼的な国益のためにどんな結果を招いたか。地獄を作り出す他国を奪う戦争の悲劇を忘れてはいけないことを告げている。このような歴史認識を徹底することによって、「他人の痛みをも我が身の上に重ねてゆく」ことが出来ないかを自問している。だからこそ人間は地上に「地獄」だけでなく「天国」を創り出していける美意識を持った存在であることを希望のように語っているのだ。

『思索の小径』がエッセイを読む楽しみに触れさせ、詩論や思索の重要さを認識する人々に読まれていくことを切に希

いなかつたのではないかと思われる。美意識こそが人間を根源的に支えて生きる活力を生み出すことの確信を身をもって語っている詩論や美学は、多くの詩人や芸術を愛する人々を勇気づけるに違いない。一章「随想」も本格的なエッセイだが、二章「論説」も本格的な詩論であり、芸術論であり、政治・権力論だ。思索の楽しみを知る方にはこの章は刺激的で興味深いだろう。

三章「後記泡沫——『槐』誌通巻」二十三編は、雑誌に連載していたエッセイだが、いろは歌四十七文字の初めの二十三文字を通し番号代わりとして人の世の無常を語っているが、文明批評もあり、亡くなった人々への愛惜に満ちた文章などもある。冒頭の「(い)地獄は……」には、鳥巢さんのこの地上に生きるための透徹した認識が語られていて勇気づけられるので引用してみる。

地獄はこの世にある。ふつう人には断続的にやってくるわけであるが、幼くして抱えた地獄を引き摺って、戦後のかたちをそのままに周りに漂わせて、故国の土を踏まれた、中国在任の親を見失つた人達の傷跡の深さに、胸打たれぬ者はいない。戦争とはかくも残酷なものであつた。そして運命とは不可抗力のものであつた。国内にも、多くの親を失つた人達があつた。戦争で失おうと、事故で失おうと、病気で失おうと、あとの苛酷な境遇は似たようなものにな

望している。